6．　人間観

6－1．人間の分類

6－1－1．性と年齢による分類

赤ん坊：ソンタク sontak。「私の赤ん坊」ク　コロ　ソンタク ku kor sontak～　ク　コロ　ソン ku kor son

男の子：ヘカチ hekaci

女の子：マッカチ matkaci

名前が分からないよその子供に呼びかけるとき、日本語で「僕！」とか「姉ちゃん！」というのと同じようにヘカチ、マッカチと言った。20歳くらいまでの人に使い、それ以上大きくなると何々クルと名前を呼んだ［稲葉徳一氏］。

若者（17、8歳）：男は、オクカィポ okkaypoで、女はポン　メノコ pon menoko（メノコポとは言わない）。

男：オクカィ okkay

女：メノコ menoko

結婚した女：クルマッ kurmat（「どこそこの奥さん」の意味だ［稲葉徳一氏］）

年取った男：ルプネクル rupnekur

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

6－1－2．技能による分類

ここ（チン・コタン）は、新井田系と三上系で、三上は漁師をやっていた。三上さんの父親は雄弁家で、頭もよく、優れた人だった。こういう人をパウェトク pawetokという（静内の言葉では「雄弁家」をチャウェトクコロ　cawetokkorという）。ウェン　イタク wen itak（のろい言葉）の系統の人はあまり出世しない。パウェトクは、口が達者なことで、何事にも弁が立つ。今の弁護士みたいに、頭の悪い人のところに行って話をつけてやる。チャランケ　caranke（言い争い）にはパウェトクが勝つ。

パウェトクの反対で、余りしゃべらない人はオッチネ otcineという。頭のいい人に押しまくられてあまりしゃべれない人のことだ。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

漁のあまりない人をイペサク ipesakという。そういう人はシシャモ漁に一緒に連れて行かないものだ。（5－1－2参照）

カッケマッ katkematとは男の人と対等の能力のある年寄りの女の人。年寄りなら誰でもと

いうわけではない。酒作りはカッケマッの役目だ。

［鵡川汐見、稲葉徳一、新井田キク氏］

霊感の強いばあさんをヌプル　フチ nupur huci、トゥス　フチ tusu huciという。若い人ならヌプル　カッケマッ　nupur katkematという。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

馬鹿者：ハィタクル haytakur

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

6－1－3．身分・家系による分類

系統

孫じいさんに聞いたが、孫じいさんで新井田の家は7代目だという。チン部落には大きく言って新井田、三上の2つの系統がある。

熊をあづかっていた人の父親は、パエトク　paetok（静内ではチャエトク　caetokという）の評判の高い人で、春日の人と喧嘩になりウェンイタク　wenitak（呪いの言葉）をしゃべり、チェホルカケプ　cehorkakepのイナゥをこちら岸から春日の向こう岸へ渡したという話がある。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

孫じいさんは「サカンリトク」という名だったが、こんな話をしてくれた。新井田家は自分で7代目だが、初代が生まれる前に大津波があって、7人を除いて部落が全滅した。そのときの津波は穂別の富内の山まで行ったという。チン・コタン（汐見）に人が増えたのは、大津波の後、生き残った人々が山厚真の人々と結婚して、親戚関係ができてからだ。

富川、沙流の人とチンの人は親戚関係にない。穂別ともない。ただ、何かあれば春日へは呼ばれて行く。

［鵡川汐見、新井田セイノ、新井田キク氏］

チン・コタンで1番偉い人は、新井田スサンクルという人だった。

［鵡川春日、大川原絹代氏］

6－1－4．親族用語

行政区の鵡川と穂別の言葉は、異なるところがある（9－1参照）。婿が穂別の豊田の人だから、穂別の言葉を聞いている。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

父：鵡川（現在の行政区の意味で、汐見のことを主に指す）では、イヤポ　iyapoというが、穂別（行政区の意味）ではハポ　hapoという。

母：鵡川ではハポ　hapoといい、穂別ではトット　tottoという。白老、厚真までは、父のことをミチ　miciという。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

父　イヤポ　iyapo、母　ハポ hapo（穂別では母のことをトット tottoといった。父をなん

と言ったかは忘れた）

［穂別、森本八重氏］

祖父：エカシ ekasi

祖母：フーチ húci

おじさん：アチャポ acapo（親族以外にも使う）。ク　ユポ ku yupoと呼びかけることもある。「兄貴」という意味であるが、年上の男性を指して用いられる。

おばさん：ウラルペ unarpe（親族以外にも使う）。ク　サポ ku sapoと呼びかけることもある。年上の女性を指して言うことばである。

兄：ユピ yupi　～ユピヒ yupihi（hが有声化されることがある）

弟：アキヒ akihi

姉：サハ saha。ク　サハ ku saha　「自分（私）の姉」

妹：マタキ mataki。トゥレシ turesiは「なじみ」のこと。「私の夫」のこと（？）［稲葉徳一氏］

従兄弟：イルワキ irwaki。「また従兄弟」は何というか知らない。

夫：「私の夫」ク　ホクフ ku hokuhu　～ク　ホク ku hoku。「あなたの夫」はエ　ホク e hoku。「私の夫」は、丁寧な言い方では、ク　コル　ニシパ ku kor nispa。

妻：マチヒ macihi。「私の妻」はク　マチヒ ku macihi。「あなたの奥さん」は、丁寧な言い方では、エ　コル　カッケマッ e kor　katkemat。

夫婦同士では、夫が妻をハポ hapo、妻が夫をイヤポ iyapoと呼び合う。妻が夫に呼びかけるとき、アヌ　ヤン anu yan！と言い、夫がそれにヘマンタ　hemanta「何だい」と答えた。［新井田キク氏］

息子：「私の息子」ク　ポホ ku poho

娘：「私の娘」ク　コル　オペル ku kor oper

孫：ミッポホ mitpoho（ホ -ho は、「自分の」という意味で加えるもので、ミッポだけなら、誰の孫か分からない［稲葉徳一氏］）。ク　ニプポホ ku nippoho　［新井田セイノ氏］

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

6－2．身体部位名称

［頭部］

頭：サパハ sapaha

髪：オトピヒ otopihi

顔：ナヌフ nanuhu

額：ノィポロホ noyporoho

まゆげ：ラルフ raruhu

まつげ：シクラプ sikrap～シクラプ sikrapu

目：シキヒ sikihi

耳：キサラ kisara　～キサラハ kisaraha

鼻：エトゥフ etuhu。ク　コル　エトゥフ ku kor etuhu「私の鼻」。

口：パロホ paroho（静内の言葉では、チャロホ carohoという）

唇：パトィ patoy、パトイェ patoye

舌：パルンペ parunpe

顎：ノッケゥ notkew　～ノッケウェ notkewe

喉：レクチ rekuci

首筋：オクケウェヘ okkewehe

［腕部］

肩：ニシタピ nistapi

手：テケヘ tekehe（腕のことも手の先のことも言う）

肘：シットキ　sittoki

指：アシケペチ askepeci

爪：アミヒ amihi

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

［胴部］

胸：サムベ sampe。ク　サムベ　アルカ　フミ ku sampe arka　humi「私の胸が痛い」

［鵡川汐見、新井田キク氏］

腹：ホニヒ honihi

背中：セトゥリ seturi

背骨：分からない。

腰(尻と背中の間の曲がる所)：イクケウェ ikkewe。イクケウェ　アルカ　フミ？ikkewe arka humi「腰が痛いの？」

尻：オソロ osoro～オソロホ osoroho

男根：チイェヘ ciyehe。

女陰：女のものを何というか忘れたが、ふざけてサマムベ samampeと言うことがあった。女の子がだらしない格好で座っていると、オソロホ　ヌィナ　osoroho nuyna！「前を隠せ！」と叱る［稲葉徳一氏］

［脚部］

足（全体）：チキリ cikiri

膝かぶ：コクカサパ kokkasapa

すね（「すねっから」）：ニサピヒ nisapihi

骨：ポネヘ ponehe。ポネヘ　アルカ　フミ？ソンノ　ヘ？ ponehe arka　humi．sonno he？「骨が痛いのか？本当か？」

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

（Aは、単独で言う場合、Bは「私の～」と言う場合、Cは「おまえの～」と言う場合である）

	A	B	C
頭	サパハ	ク　サパ（ハ）	エ　サパハ
	sapaha	ku sapa（ha）	e sapaha
背	セトゥルフ	ク　セトゥルフ	エ　セトゥルフ
	seturuhu	ku seturuhu	e seturuhu
胸	ペンラム	ク　ペンラムフ	エ　ペンラムフ
	penramu	ku penramuhu	e penramuhu
手	テケヘ	ク　テケヘ	エ　テケヘ
	tekehe	ku tekehe	e tekehe
手のひら	テクコトロ	ク　テクコトロ	エ　テクコトロ
	tekkotoro	ku tekkotoro	e tekkotoro
足	ケマハ	ク　ケマハ	エ　ケマハ
	kemaha	ku　kemaha	e kemaha

「ケマハ　サンケ　kemaha sanke　したらだめだ」（足を出したらだめだ）、「ケマハ　トゥリ　kemaha turi（足を伸ばす）するな」と親に言われた。

あぐらを組む	ウキロソレ　ukirosore		
すね（おもて）	ニサピ	ク　ニサピ	エ　ニサピヒ
	nisapi	ku nisapi	e nisapihi
かかと	ケスピ	ク　ケスピヒ	エ　ケスピヒ
	kesupi	ku kesupihi	e kesupihi
足の裏	ウレアサム	クレアサマ	エ　ウレアサム
	ureasam	k uresama	e ureasama
男の陰部	チイェヘ	ク　チイェヘ	エ　チイェヘ
	ciyehe	ku　ciyehe	e ciyehe
		ク　コロ　ペ	エ　コロ　ペ
		ku　kor pe	e kor pe
女の陰部	チプ	ク　コロ　チプ	エ　コロ　チプ
	cip	ku　kor　cip	e kor cip
		ク　コロ　ペ	エ　コロ　ペ
		ku　kor　pe	e kor pe
目	シキヒ	ク　シキヒ	エ　シキヒ
	sikihi	ku　sikihi	e sikihi

鼻	エトゥフ etuhu	ケトゥフ k etuhu	エ　エトゥフ e etuhu
鼻の孔	エトゥプィ etupuy		
おまえの鼻かめ！			エ　エトゥフ　ニセ！ e etuhu nise !
耳	キサラハ kisaraha	ク　キサラハ ku　kisaraha	エ　キサラハ e kisaraha
口	パロホ paroho	ク　パロホ ku　paroho	エ　パロ（ホ） e paro（ho）
髪	オトピヒ otopihi	ク　コル　オトピヒ ku　kor　otopihi コトピヒ k otopihi	エ　オトピヒ e otopihi
眉	ラルフ raruhu	ク　ラルフ ku　raruhu	エ　ラルフ e raruhu
手の指	アシケペチ askepeci	ク　テケヘ　アシケペチ ku　tekehe askepeci カシケペチ k askepeci	エ　アシケペチ e askepeci
足の指	ウレペチ urepeci	クレペチ k urepeci	エ　ウレペチ e urepeci
爪	アミヒ amihi	カミヒ k amihi	エ　アミヒ e amihi
肩	タプストゥフ tapsutuhu	ク　タプストゥフ ku　tapsutuhu	エ　タプストゥフ e tapsutuhu
首	レクチヒ rekucihi	ク　レクチ ku　rekuci	エ　レクチ e rekuci
腰	イクケウェ ikkewe	ク　イクケウェ ku　ikkewe	エ　イクケウェ e ikkewe
尻	オソロ osoro	コソロホ k osoroho	エ　オソロホ e osoroho
尻が痛い		コソロ　アルカ　した k osoro arka *sita*	
肛門	オソルプイェ	コソルプイェ	エ　オソルプイェ

	osorpuye	k osorpuye	e osorpuye
毛	ヌマハ	ク　ヌマ	エ　ヌマ
	numaha	ku　numa	e numa
肘	シットキ	ク　シットキヒ	エ　シットキヒ
	sittoki	ku　sittokihi	e sittokihi
膝	コクカサパ	ク　コクカサパ	エ　コクカサパ
	kokkasapa	ku　kokkasapa	e kokkasapa
乳房、乳	レラリヒ	ク　レラリヒ	エ　レラリヒ
	rerarihi	ku　rerarihi	e rerarihi
お乳飲みなさい！		ク　レラリヒ　ヌン！	
		ku　rerarihi nun !	

いつまでもお乳を飲む甘えっ子に「イヌンヌン inunnunばかりする」（お乳ばかり飲む）と言う。

脇の下	ニヤルポキ		
	niyarpoki		
皮膚	カプフ	ク　カプフ	エ　カプフ
	kapuhu	ku　kapuhu	e kapuhu
骨	ポネヘ	ク　ポネヘ	エ　ポネヘ
	ponehe	ku　ponehe	e ponehe
血	ケム		
	kem		
血が出た		ク　コル　ち　でた	
		ku　kor *ci deta*	
	ケムヌ　した		
	kemnu *sita*		
体	ネトパケ	ク　ネトパケ	エ　ネトパケ
	netopake	ku　netopake	e netopake
腹	ホニヒ	ク　ホニヒ	エ　ホニヒ
	honihi	ku　honihi	e honihi
肉	カミヒ	ク　カミヒ	エ　カミヒ
	kamihi	ku　kamihi	e kamihi

［穂別富内、森本八重氏］

6－4．身体の世話

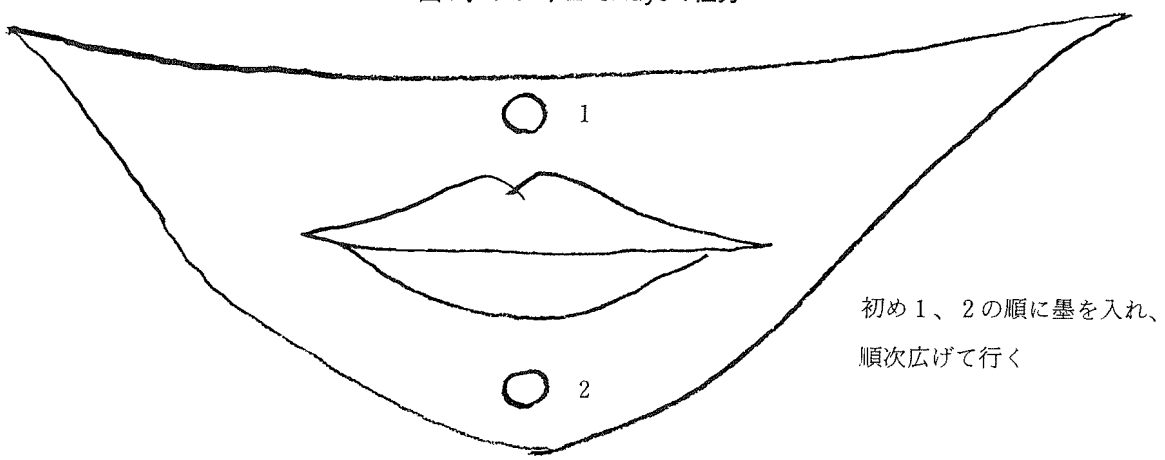
6－4－1．文身

文身をシヌイェ sinuyeという。口にする入墨をパロ　シヌイェ paro sinuye、手の甲にする入墨をテク　シヌイェ tek　sinuyeという。

娘が17、8歳になると入墨をする。最初、唇の上と下小さくしておいて、徐々に広げていく。剃刀の先で傷をつける。1週間くらい唇が腫れて口があけず、ものが食べられないので、ヨシの茎を唇の端にくわえ、おもゆを吸って飲んだ。母は、やりかけで唇の上だけだった。完成までは3日はかかる。警察がやかましくて入墨はやめさせられた。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

図7．シヌイェ sinuyeの仕方



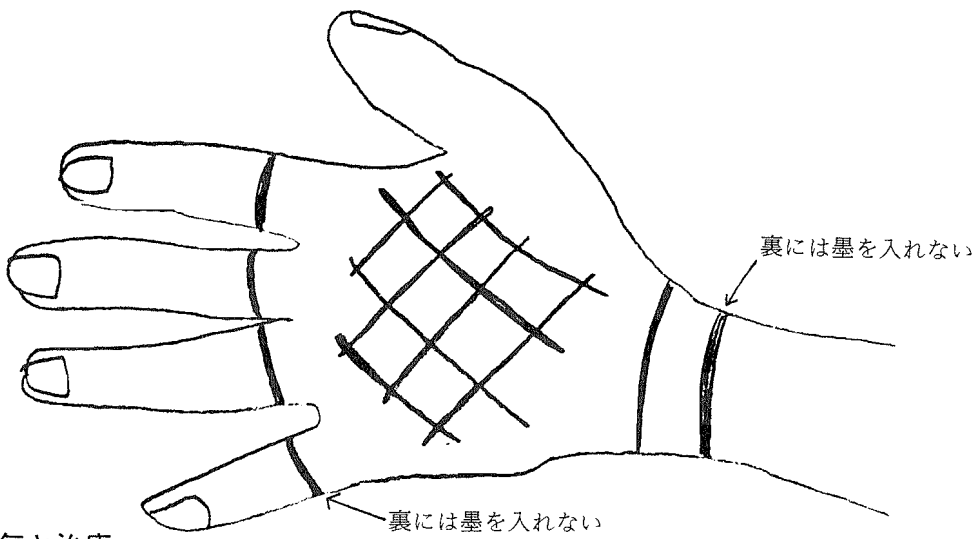
おしゃれのために入墨をすると聞いている。

［鵡川汐見、吉村フユ子氏］

昔の女の人達は口を染めて（入墨をして）いたが、これは内地（本州）の人に連れて行かれないようにするためだったという。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏、新井田キク氏］

図8．テク　シヌイェ tek sinuye の文様（新井田セイノ氏による）



6－4－2．病気と治療

熱病が流行ると大川の小島に病人を隔離したということだ。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

風邪をひいた：オムケカラ　した omkekar *sita*。キトビロ（ギョウジャニンニク）を食べていると風邪をひかないと姑などは言っていた。（3－4参照）

腹が痛い：ホニヒ　アラカ　した honihi arka *sita*。

切り傷：ピロマ piroma。

ネコアシと呼ばれる道路ぶちに高さ50cm位になる草をいっぱい採って干して置き、熱が出たとき、せんじて飲んだ。

風で倒れたネココクワの枝先や樹皮を切って、切口に瓶を当てて置くと汁が採れる。腎臓に良いと言われた。

オオバコ（「オンバコ」）は、「ガンベ」ができたとき、あぶって患部に当てた。干したオオバコの葉をせんじて、熱取り薬とすることもある。

［穂別富内、森本八重氏］

6－5．人の一生

6－5－2．出産

妊娠することをホニ　ポロ honi poroという。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

陣痛をホニ　アルカ honi arkaという。

「くせやみ（つわり）」をイヤィラク～ヤィラク～ラィラク iyayrak～yayrak～rayrak（？）という。

お産の時に「うめく」ことをヌワプ nuwapという。

お産の時、産婦の食べ物を煮炊きするための火を別にする。炉の下手寄りに新たに火を起こし、鉄でできた三脚の五徳を置き、その上に鍋をかけて煮炊きする。出産後3日程はその火を使って妊婦への料理をする。その後はあく（灰）をならしておく。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

お産の重い人は俵を枕にして寝るとよい。お産後、日が立たないと、炉の付近、上座（ロッタ rotta）など、カムィノミする所を歩かせない。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

6－5－3．育児・しつけ

私の育った家は、優秀な家ではなかったので、厳しいしつけはなかった。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

神窓（ロルンプライ rorunpuray）は、神様の通るところだから、跨いではいけないといわれた。また、川と道のそばに小便するな、といわれた。

［鵡川汐見、吉村フユ子氏］

お産する（お産するときうなる）　ヌワプ　する nuwap *suru*

妊娠している　ホンコロ honkor

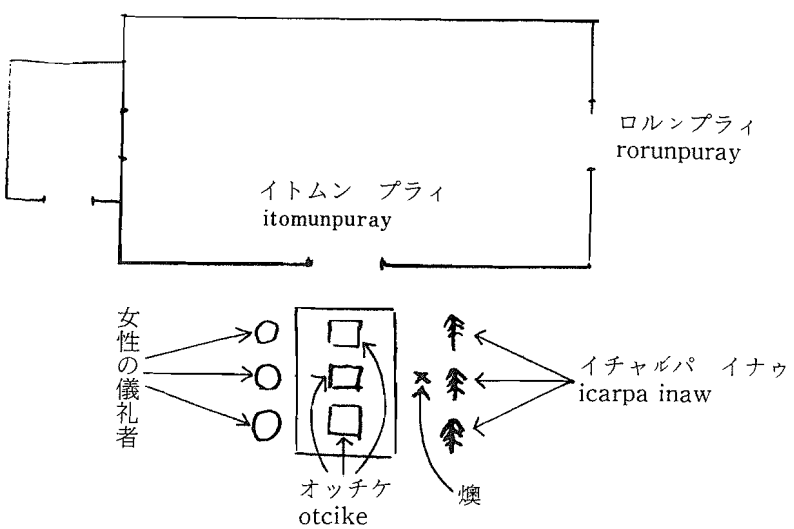
［穂別富内、森本八重氏］

6－5－7．イチャルパ（先祖供養）

イチャルパ icarpaはお盆と正月にやる。親戚が集まって来る。そこのうちの仏さんを上の代から名を呼びながら、自分達は何々というもので、供え物をするから、皆で仲良く食べてくれという。その家のイチャルパは女がやる。そのときは自分の姑、舅はもちろん、自分の産みの両親まで供養する。

はじめに男が炉縁でカムィノミ kamuynomi（お祈り）をし、火の神に先祖（男女とも）の名を言ってお願いする。その後は女がする。女は火の神からもらったおきを入れた十能と供物をいれたお膳を用意して、男のカムィノミが終わってから、それらを持って外に出る。そしてそれらを所定の位置に配置する。

図9．イチャルパ icarpa の座



お膳のことをオッチケ otcikeという。団子（シトギ）をお椀（イタンキ itanki）に入れてお膳に乗せる。団子は3つに切って、あれば筋子（チポル　cipor）をかける。この団子をチポルシト cipor　sitoという。その他、みかん、煙草などをそなえる。肉は使わない。魚を使う。干したのでも煮付けたのでもよい。物があるときは、お膳に3つも4つも供え物をする。

新しい先祖（夫の両親、自分の両親、その兄弟姉妹など）には、その一人一人にお膳を別にする。古い先祖には、エル　マラット　コル eru maratto kor（みんなと一緒に食べてくれ）と言って、共用のお膳一つで供える。イナゥつくりは男、お膳の支度は女がする。

男が炉の横座にイナゥソ inaw soと呼ぶ模様のついたカヤの織物を敷き、その上にイナゥにする木（柳の木）を置き、その木でチェホルカケプ cehorkakepと呼ぶ種類のイナゥを削る（イナゥケ inawke)。このチェホルカケプをイチャルパ　イナゥ icarpa inawと呼ぶ。このイナゥ

1本、トゥキ tuki（杯）1個、イクパスィ ikupasuy 1本、リンゴ、煙草、団子（アィヌ　シト aynu sito）（和人の餅をシサム　シト sisam sitoというのに対して）などのたべものを載せ、エチウシ eciusi（片口、エトゥヌプ etunupともいう）でトゥキに酒を注ぐ。このお膳を炉の上手（アペ　エトク　タ ape etok ta　）のイナゥソの上に置くと、男が火の神に向かってカムィノミする。このとき、神窓（ロルンプラィ rorunpuray）は開けておく。火の神に最初に祈るのは、火の神が一番偉いからだ。

男の人はお祈りの中で先祖の人の名を言って火の神に届けてくれというのではないか。火の神はアペフチカムィ apehucikamuy，フチカムィ hucikamuyという。自分の先祖の名を言って、男の先祖も、女の先祖も名を言って、これから先祖供養をするからと火の神にお願いする。

つぎに女は、親類の女と一緒に炉の火の神からおきをもらって十能（小型のスコップ）に入れて戸口から外へ出る（ソィネ soyne）。昔は、灰の上にのせて持って行ったのだろう。お膳や杯（トゥキ tuki）は、イトムンプラィ itomunpurayから外に出す。

イトムンプラィから少し離れたところにおきを置き、その手前に模様の無い敷物であるチタルベ citarpeを敷き、その上にお膳を並べる。おきの向こう側（すなわちオロンネ oronne側）にイナゥ（イチャルパ　イナゥ icarpa inaw）を立てる。

女は一人ずつ順番にお膳の前（すなわちオウトゥンネ outunne側）に座り、火の神のおきの上にイクパスィで酒を垂らし（チクカ cikka）、ついで全てのイナゥに酒を垂らし、火に食べ物を渡す。イチャルパ icarpaのときは、女もイクパスィ ikupasuyを使う。男がカムィノミ kamuynomiに使ったものを使う。各人がいくつかのお膳のそれぞれに対し同じ事を繰り返して、全てのお膳を一巡すると、つぎの女の人が同様の手順で行う。

その順番は家の奥さんが先で、次に隣近所の親戚の女達が交替で行う。

イチャルパの時の女の頭にはイエパヌ iepanuと呼ぶ黒い布を頭に巻いてある。これは、不幸があっても、お祝いがあっても女が頭に巻くものだ。また、昔の人は模様なしの黒衣（イエパヌ iepanu）を着た。これは、昔は不幸の時でも祝い事でも着た。

イチャルパで、供えて余った食べ物は皆で分けて食べる。

［鵡川汐見、新井田セイノ、新井田キク氏］

父は東静内の人だった。静内ではイチャルパ icarpaのとき、男も祭壇（イナゥチパ inawcipa）でお祈りをした。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

クマ送りとイチャルパは関係がない。熊祭りがあるからといってその時一緒にイチャルパはしない。イチャルパは、盆と正月、命日などにやる。

［鵡川汐見、新井田セイノ、新井田キク氏］

6－6．まじない、お守り

魔除

プクサ pukusa（ギョウジャニンニク）の葉は干しておつゆの実にした。また、干したものを編んで玄関に下げて魔除とした。咳をオムケ omkeという。オムケ　ア　オムケ　ア omke a omke aといえば咳が止まらないこと。（3－4参照）

子供が風邪をひくと、風邪よけと言ってにんにく（昔は、風邪よけに、にんにくのかわりにネンピロ nempiro（タマビロ）を使った。川原に生えていた。［新井田セイノ氏］）を袋にいれて首から下げた。また、男の年寄りにたのんで、プクサ、米、煙草、ひえをお盆に入れ、火の神にそなえ、風邪の神にもたせてやるまじないがあった。これをハルソィオマレ harusoy'omareという。供えものの入ったお盆を子供の頭の上で3回、まわしてロルンプライ rorunpurayから外へ出す。（3－4参照）

［鵡川汐見、新井田セイノ、新井田キク氏］

プクサの干したものを手に持ってそれでフスサフスサ hussahussaとかけ声をかけながら体をはらうことをフスサカル hussakarという。姑さんが、孫が風邪を引いたときやっていた。

［鵡川汐見、新井田キク氏］

悪いものがついたとき、蓬ではらう。火の神に言って、オウトゥンネ outunne（家の外の下手側）に連れて行ってフスサカル hussakarした。

［鵡川汐見、新井田セイノ、新井田キク氏］

ハルソィオマレ harusoy'omareをすると、風邪の神は臭いものを嫌うので、おみやげを持って帰ってくれるという。

「鵡川汐見、新井田セイノ、新井田キク氏］

キキンニ kikinni（エゾノウワミズザクラかナナカマドか不明）を戸口に刺しておいた。

「ニンニク」を糸に通して、体の弱い子の首に下げた。

うちのじじ（姑）の弟はコクワの木の先を切って一升瓶に集め、腎臓に良いと言って飲んでいた。

足が痛くなったとき、「オンバッコ」「ネジトリ」「ネコアシ」などの草の葉をもんで、当てた。

［穂別、森本八重氏］

6－7．訴訟

チャランケ caranke は「喧嘩」だ。今で言えば裁判に当たる。夜も昼も寝ないでやって、負ければ勝った方にあるもの全部をさらっていかれる。パウェトク pawetok（雄弁家）の方が勝つ（6－1－2参照）。

［鵡川汐見、新井田セイノ氏］

6－8．交易・交通

エカシ（古老）達の話では、鵡川の人は、十勝の人と仲が悪かったそうだ。

喧嘩もしたし、チャランケ（caranke　裁判）にもなった。夜昼なく、村長をつるし上げて刀や

シントコ（sintoko　行器）などの宝物を勝った方がもらってきたそうだ。十勝の人が負けて鵡川の人が十勝の人から宝物を巻き上げて逃げて来るのだ。

戦争をトゥミ tumiとかトパットゥミ topattumiと言う。十勝の人はオカユしか食べない、オカユが熱いからフーフー吹く。そのフーフー吹いている間に鵡川の人が攻めて十勝の人を全滅させたのだそうだ。それ以来十勝の人は、オカユをフーフー吹かなくなったという。

十勝から鵡川へ仕返しに来た。男も女も、子どもを背負って来たのだそうだ。ミヤウチの奥に岩がかぶさるようになったところがあり、そこで十勝の人が死んだので今でも蛇になっているという。

日高とも、昔戦争があったそうだ。

鵡川の人も、日高の人も厚岸場所へ行ったそうだ。浜なりに（浜づたいに）歩いて行くと、静内あたりの道路の縁に熊の頭を野ざらしにしてあり、「我々の一番の神なのに、粗末にしている」と思い、訳を尋ねてみると、「ある家に、男とその娘が暮らしていた。娘が浜へ出て磯回り（磯で食べ物をさがす）をしていると、そこに熊も磯回りに出てきていた。娘がその熊に殺されたので、仕返しに熊を殺して野ざらしにしたのだ」と言う。

そこで、チャランケになり、日高の人が負けた。

この話は、マタギをしていた新井田キク氏の兄の勝男氏が、日高に猟に行ってある老夫婦の家に泊まったときに、鵡川の人にはこういう恨みがあるのだと教えてくれた。

千歳や石狩とは戦争は無かったと言う。

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田キク氏］

チン出身なのでチンの人とばかり行き合って、サルの人との付き合いはない。
富川の人と行き合ったこともない。

［穂別富内、森本八重氏］

和人をシサム　sisam、和人の女をクルマッ　kurmatという。

［鵡川汐見、稲葉徳一氏、新井田キク氏］